

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24310184

研究課題名(和文) 中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族：「近代化」再考のための視座の構築

研究課題名(英文) Islam, Gender and Family in Central Asia: Seeking New Perspectives for Rethinking Modernity

研究代表者

帯谷 知可(OBIYA, Chika)

京都大学・地域研究統合情報センター・准教授

研究者番号：30233612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会主義を経た旧ソ連中央アジアを対象に、イスラーム・ジェンダー・家族の観点から、近代化をアクチュアルな問題群として捉え直す視座の構築を目的に、ウズベキスタンとの国際共同研究として展開された。19～20世紀の民族誌と現代のフィールドワークとの摺合せ、「近代」表象資料の収集と分析等を行い、最終年度に国際ワークショップ Islam and Gender in Central Asiaを実施、成果として英文論文集を刊行した。イデオロギー先行の社会主義的近代化において、公には切り捨てられた「悪しき伝統」の存続の動態や、構築された「よき近代」の今日の権威主義体制への継承等を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project was conducted as an international collaboration research with Uzbekistani researchers with an aim to construct new perspectives for rethinking modernity for Central Asian countries that experienced Soviet socialism. We examined some related ethnographies written in 19-20 centuries in comparison with results of contemporary field works, collected and analyzed materials with images of socialist modernity, and in the last year of the project organized an international workshop "Islam and Gender in Central Asia," the result of which was published in English. We shed light on the dynamism how "bad traditions" under ideology-led socialist modernization were actually survived, how "good modernity" constructed under socialism was succeeded to today's authoritarian regime, and how these values have been changing complicatedly.

研究分野：中央アジア地域研究

キーワード：中央アジア地域研究 社会主義的近代化 イスラーム ジェンダー 家族 国際研究者交流 ウズベキスタン

1. 研究開始当初の背景

(1)旧ソ連中央アジアでは、今再び「近代」が問われている。帝政ロシアによる支配に続いてソ連体制下に組み込まれた中央アジアは、そのもとでソ連的社会的近代化(社会経済的には工業化・都市化・公教育の普及など、政治的には近代国家としての制度と国民概念の創出など)を一定程度達成したと考えられてきた。しかし、その近代化が概してロシア=ソヴィエト的諸秩序の強制的移植という側面を少なからず持ったこと、ソ連解体後に民族文化の見直しの文脈から伝統回帰志向が顕著となったことやソ連圏外から流入するイスラーム復興の諸潮流などにより、社会主義的近代化の成果を是とする価値観は大きく揺らぎ、再考を迫られているのが現状である。

(2)このような状況において中央アジアの現在をグローバルな視点から深く理解するためには、ポスト社会主義人類学で提唱されたように、「伝統・社会主義・現在」という歴史的位相を設定し、なおかつ同時代的な分析視点に立って、中央アジアの近代化の諸相を多角的に検証する必要性があった。

2. 研究の目的

(1)本研究は、上記1.をふまえ、旧ソ連中央アジア、特にウズベキスタンを対象として、伝統(帝政ロシア支配期)、社会主義(ソ連期)、現在(ポスト社会主義、ソ連からの独立以降)という歴史的位相を意識しつつ、ソ連期に重点を置いて、社会主義的近代化において否定された、あるいはその成果が限定的にとどまったと指摘される、イスラーム・ジェンダー・家族といった領域における複合的な変容とそのための装置や内的論理の転換過程を多角的に検証することを第一の目的とした。

(2)そのような検証を通じてソ連型社会主義における中央アジアの近代化の特質を明らかにすることを第二の目的とした。

(3)さらに、ソ連解体後あたかも「伝統」と「近代」をめぐる価値観が逆転したかのような旧ソ連中央アジア地域にとって、人間にとってよりよい社会の構築、幸福の実現という広い意味での近代化という問題を今なおアクチュアルな問題群としてとらえ直す視座を構築することを目的に含めた。

3. 研究の方法

(1)本研究は、ウズベキスタンの著名な中央アジア・イスラーム史研究者バフティヤル・ババジャノフ氏(申請当時ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所主任研究員、現在は国立東洋学大学附属東洋写本センター主席研究員)を海外研究協力者として、国際共同研究として実施した。

(2)日本側においては、研究代表者のもとに、ウズベキスタンで継続的フィールドワークを実施する若手研究者若干名からなる研究グループを組織し、中央アジアの伝統と近代を記述してきたとされる帝政ロシアおよびソ連の民族誌等を現代のフィールドワークから得られるイスラーム・ジェンダー・家族をめぐる諸問題と批判的に照合する作業を行った。

(3)ウズベキスタン側では、ソ連時代にイスラームを管理・監督する公的機関としてウズベキスタンの首都タシュケントに設置された中央アジアおよびカザフスタン・ムスリム宗務局関連の資料研究および同宗務局にまつわる人々の記憶の掘り起しの作業を行った。

(4)ウズベキスタンにおいて、社会主義的近代化に関連する多様な資料(出版物、文書、ファトワー、映画、ポスターなど)を収集し、分析した。

(5)上記(1)~(4)で得られた成果を国際ワークショップにおいて報告し、英文論文集としてまとめた。(下記5.[図書])

4. 研究成果

(1)2015年12月26日(土)京都大学稲盛財団記念館において本研究の成果報告のための国際ワークショップを開催した。プログラムは以下の通り。参加者はウズベキスタンからの4名を含む13名であった。また、その成果報告書として、下記5.[図書]を刊行した。

(2)イスラームを本質的に男性が女性を抑圧する遅れた、劣等他者の文化と見なすような、19世紀ヨーロッパで形成された植民地主義的言説は、ロシア革命以前のロシア帝国においても帝国内のムスリム地域に対する視線の中に共有されており、それはソ連体制のもとでも形を変えて継承されていた。社会主義的なイデオロギーの一部を成した歴史の発展段階論や科学的無神論は、伝統/近代、後進/進歩といった二分法をロシア革命の前と後という形でより明確にし、悪しき伝統を根絶し、社会主義を建設することこそ進歩であり近代化であると喧伝された。ソ連における「後進的な東」とみなされた中央アジアでは、悪しき伝統とはイスラームと家父長制だとされた。このような見方は中央アジア現地の価値観や慣習を無視した上からの極めて性急で強制的な近代化政策に強く反映されることとなり、イデオロギーに照らして「よいもの」と「悪いもの」が極めて明確に提示されたことは本研究で収集されたソ連時代の近代化を表象した資料にもよく表われている。70余年の間に根付いたこのようなソ連的な二分法的思考は、ソ連時代のウズベ

キスタンの政治エリートらに、さらにソ連解体を経た独立後の政治エリートらに継承されており、そのことが同じウズベク人の中に「他者」を生み、それを排除するというような、今日の政治・社会問題におけるねじれや歪みを生じさせている。

(3)1920年代後半に上からの近代化の一環として実施されたソ連の女性解放運動は、ウズベキスタンではイスラーム・ヴェールの放棄に象徴され、ヴェールをつけた女性のいない民族こそ進歩的で、社会主義建設を担いうる主体とされた。しかし、ヴェールの根絶は、保守的な人々からの猛反発が起こるなど困難をきわめ、ソ連体制のもとで数十年をかけて徐々に実現された経緯があった。独立後のイスラーム復興の中で、伝統的でないイスラーム・ヴェールが登場したが、独立後の為政者たちは、イスラームを民族の重要な伝統の一部と認めながらも、明確に世俗主義を掲げており、イスラーム過激主義への懸念という観点から新しいスタイルのヴェールを厳しく取り締まるようになっていく。そうした人々においては、ヴェールを悪しきものに結びつけ、イスラームの政治化を容認しない価値観が深く根付いているのである。一方で、新しいヴェールの着用は伝統回帰としてのみとらえられる現象ではなく、むしろ今日的な新しい意味が見出されるケースが多く、伝統的な価値観を保持しつつ、女性が主体的に生きるための主張や、ささやかな願い事がこめられていることが確認できる。こうした事例は、ソ連体制がなくなってなお、そのような「個」の領域に国家がどこまで介入するのかという重要な問題をも提起するものである。

(4) 科学的無神論を是とする社会主義的近代化のプロセスにおいて、世俗主義は近代を象徴するもののひとつであった。ムスリム宗務局はソ連政権の近代化政策推進をイスラームの文脈から説明できる材料を見出し、ファトワーに反映させるなどの努力を常に行っており、ソ連の諸政策を支えた具体的な言説やロジックが明らかになった。そのために、時としてイスラーム学的な知識が総動員されることさえあった。宗務局が政府に従属する構図は、独立後に組織再編を経たものの、基本的に継承されており、独立後のウズベキスタンにとって好ましいイスラームのあり方が模索されている。宗教が半ば政治に従属する、あるいは常に政治の側から監視される形の世俗主義であり、政教分離のあり方である。

(5) このような形で上からの近代化が推進されたにもかかわらず、人々の生活の実態という点では、イデオロギー上悪しきものとして否定され、根絶されたことにされながらも、実は脈々と存続した慣習や規範があったこ

とはすでに多くの事例をもって報告されてきた。本研究においても、イスラーム法による婚姻がソヴィエト法による婚姻と並存し、むしろイスラーム法による婚姻が実際の家族状況や生活を反映していたこと、粛清の対象になりにくかった女性イスラーム知識人によって継承されたスーフイズムの儀礼が維持されていたことなどが明らかになった。しかし、今日の権威主義体制のもとで、外からのイスラーム過激主義への懸念という要素が加わって、これらは失われつつあるという現実がある。

(6) ジェンダーや家族をめぐる規範は、さまざまなソヴィエト的な法や制度が整備されたとはいえ、最も社会主義的近代化が実現されにくかった領域である。その意味では、女性の隔離に類するような状況や家父長制的な家族関係は現在にも見られ、男女平等が実現されていない側面もある。ソ連解体後の市場経済への移行と経済的混乱の中、女性をそのような変動の中での犠牲者とする見方が提出されてきたが、むしろ限定的な条件の中で、伝統的な規範を遵守していることを担保しつつ、生きがいを見出しつつ暮らしている女性たちのあり方に目を向けることも必要である。一方で、独立後の経済的混乱や貧困、特にそれに由来する近年の出稼ぎ移民の問題は、根強く残ってきたジェンダー規範や家族規範を急速に変容させ、家族の形も変化を余儀なくされている。この現象はまさに現在進行形の問題であり、今後も注目が必要である。

(7) 以上のような点をふまえ、ソ連的社会主義的「近代化」の成果をあらためて再検討し、そしてポスト社会主義時代のよりよい社会を構想するために重要なことは、伝統/近代に代表されるような二分法を脱構築し、従来の近代化論において切り捨てられがちであった伝統的価値観を考慮に入れ、同時に旧社会主義圏にも資本主義圏にも共通するポスト近代の諸問題の解決をも視野に入れて、民主主義や個の尊重を追及していくことではないか。そのために、中央アジア研究の視座として、旧ソ連地域研究と中東イスラーム地域研究を架橋することがぜひとも必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

帯谷 知可、「民族」の成立と国境画定、帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編、朝倉世界地理講座 5 中央アジア、朝倉書店、査読無、2012、183 - 195

帯谷 知可、「トルキスタン集成」のデー

データベース化 その課題と展望、帯谷知可編、トルキスタン集成が拓く世界、京都大学地域研究統合情報センター、査読無、2013、5 - 12

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/publish/5.html>

OBIYA, Chika, Turkestanskii Sbornik as a Compilation of Colonial Knowledge: Focus on Its Indexes, 帯谷知可編、トルキスタン集成が拓く世界、京都大学地域研究統合情報センター、査読無、2013、6 - 15

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/publish/5.html>

帯谷 知可、ウズベキスタンの映画 中央アジア近現代史に思いをはせながら、地域研究、地域研究コンソーシアム、査読無、13巻2号、2013、381-386

帯谷 知可、小松久男『激動の中のイスラーム 中央アジア近現代史』、イスラーム世界研究、KIAS、査読無、2015、367-370

OBIYA, Chika, "The Politics of the Veil" in the Context of Uzbekistan, Obiya, C. ed., Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society, CIAS, 査読無、2016、7-18

帯谷 知可、社会主義的近代とイスラームが交わるころ ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題からの眺め、村上勇介・帯谷知可編、融解と再創造の世界秩序、青土社、査読無、2016、161-183

帯谷 知可、中央アジアのムスリム定住民女性とイスラーム・ヴェールに関する帝政ロシアの植民地主義的言説、西南アジア研究、査読無、84巻、2016、(印刷中)

〔学会発表〕(計3件)

OBIYA, Chika, Imperial Russia's Eyes on Central Asia: Turkestanskii Sbornik as a Set of Colonial Knowledge, International Symposium "Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks," (2013/3/3, Toyo Bunko)

OBIYA, Chika, "The Politics of the Veil" in the Context of Uzbekistan, International Workshop "Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society," (2015/12/26, CIAS)

Обия, Чика, «Из страниц истории национального размежевания в Центральной Азии», 筑波大学ユーラシア・日本共同研究プログラム(招待講演)(2015/11/27, 筑波大学)

〔図書〕(計7件)

帯谷 知可他編、朝倉書店、朝倉世界地理講座5 中央アジア、2012、470

帯谷 知可編、京都大学地域研究統合情報センター、トルキスタン集成が拓く世界、2013、47

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/publish/5.html>

帯谷 知可編、京都大学地域研究統合情報センター、トルキスタン集成が拓く世界、2013、72

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/publish/5.html>

帯谷 知可監修、京都大学地域研究統合情報センター、トルキスタン集成全594巻巻別インデクス、2014、(CDにつきページなし)

帯谷 知可編、京都大学地域研究統合情報センター、書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る、2015、55

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/publish/5.html>

OBIYA, Chika, ed., CIAS, Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society, 2016, 77

村上 勇介・帯谷 知可 編、青土社、融解と再創造の世界秩序、2016、212

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織 3

(1)研究代表者

帯谷 知可 (OBIYA, Chika)

京都大学・地域研究統合情報センター・
准教授

研究者番号：30233612

(2)研究分担者

(3)連携研究者